

# 生活満足感の推移から見る生活者像

## 安心から変化へ

豊田 尚吾 *Written by Shogo Toyota*

### はじめに

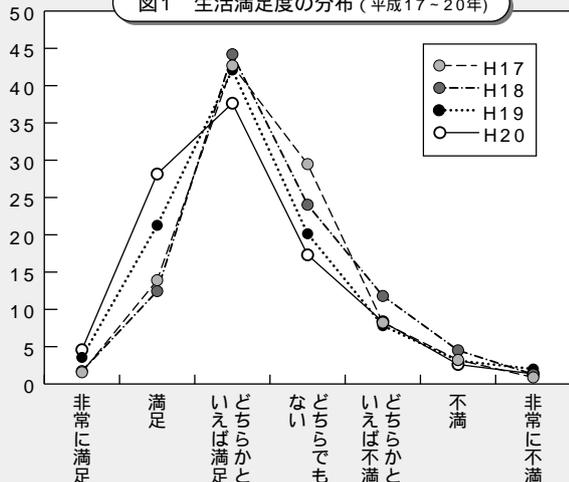
原油価格の高騰などを反映して、さまざまな生活財が値上がりしている。年金、後期高齢者医療制度、ガソリン価格の高騰といった不安要因も大きい。そのような中、生活者はどのような意識で日々暮らしているのだろうか。

今号の「CEL TOPICS」でも紹介しているように、当研究所では、毎年全国約千人の生活者に対し、生活意識調査を行っており、今年で四回目となった(うち第一回、三回、四回は留置調査、第二回は郵送調査、実施時期は一月末から二月)。その調査の中で、毎回、回答者の生活満足度を訊ねている。基本的には個人の私的な生活実感を反映した満足度であるが、当然、その背景にある社会情勢にも大きな影響を受ける。したがって、その経年の推移を見ると、生活者の社会に対する大まかな見方を把握することができて興味深い。本稿では、その推移と関連するアンケート結果をもとに、生活者の意識の変化を考察することを試みる(アンケートの概要に関しては、「CEL TOPICS」を参照)。

### 生活満足度はこの二年で急改善

図1は四年間(平成一七年〜平成二〇年)の生活満足度の分布を表したものである。大きな特徴としては、足元の二年で満足度の改善傾向が明確になった点が挙げられる。平成一七年から一八年までは、ほとんど変わらないが、むしろ少し悪化しているのに対し、平成一九年、二〇年の改善幅は大きい。特に、「非常に満足」「満足」の回答率が平成一九年、二〇年の調査で大きく増加している。逆に「どちらかといえば満足」層は、平成二〇年に大きくシェアを減らし、おそらく、より満足度の高いクラスに移動した。「どちらでもない」層は、四年間をつうじて比較的コンスタン

図1 生活満足度の分布(平成17-20年)



各図は大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所「これからの住まいとライフスタイル」に関する生活意識調査(H17-H20)のデータをもとに作成

トに減少傾向にあり、不満層は平成一八年の調査で大きく減った後は、変化があまりない。

一応、景気回復局面が継続しているということは、生活満足度の判断にとってプラス要因である。しかし、景気は昨年あたりからやや頭打ちになりつつあるし、昨夏にはアメリカのサブプライムローン問題が顕在化し、世界の金融市場は混乱している。また、生活関連の物価、各種料金などが値上がりし、セーフティネットについても生活者にとっての改善はあまりない。それにも関わらず、今回、生活満足度の回答に関して、今までに比べてより大きく改善したのは、どのような理由からなのだろうか。

アンケートでは、生活全体の満足感のほかに、特定の生活満足度に関する質問をしている。図2「生活の安定や安心」、図3「生活が変化に富んでいるかどうか」、図4「未来に対する希望を持つことができるか」、図5「人間関係」、図6「生活の自由度が確保されているか」、図7「自分らしく生きているという実感があるか」、図8「自分なりの正義や善なる心に基づいた生活をしているか」である。これらの個別の満足度も生活全体の満足度の改善よりは小さいものの、同じように向上している。ただ、「未来に対する希望を持つて生活できるか」に関しては、改善傾向にあること自体は他の要因と同様であるが、その幅は小さい。これから見て、先行きは楽観できないものの、当面の不安要因はある程度緩和されている。結果として、さまざまな側面から見た生活満足度の向上が、全体的な満足度に反映されている。そのような生活者像を想定することができる。

**満足度を規定する要因は安心から生活の変化へ?**

ここで、統計的なデータ分析を試みた。例年、全体の満

図3 変化に富む

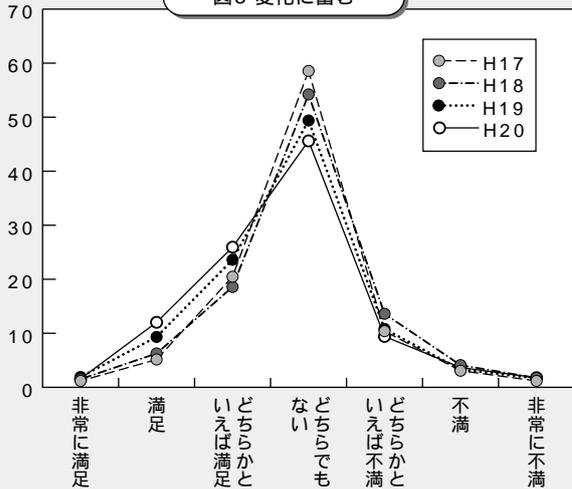


図2 安定や安心

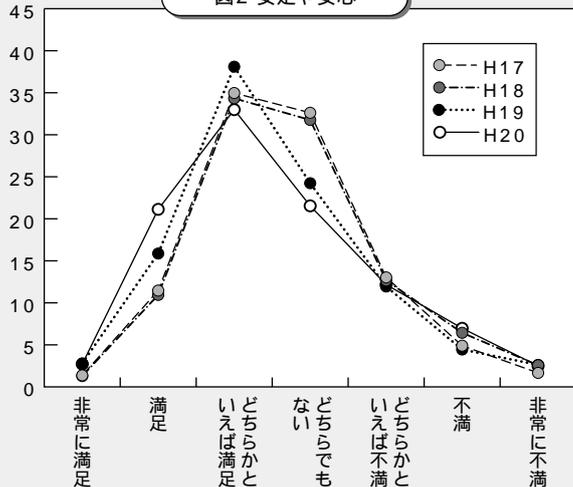


図5 人間関係

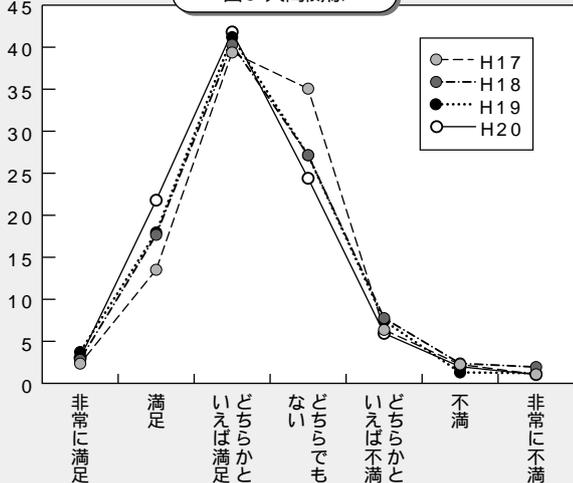
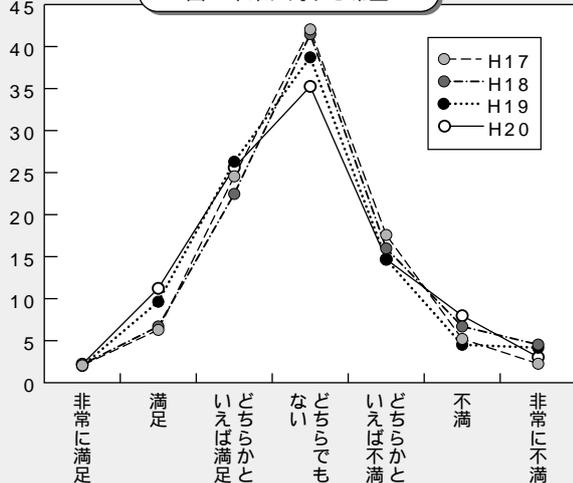


図4 未来に対する希望



自由度を被説明変数に、その他の個別満足度を説明変数として回帰分析を行っている。今回も同様に計算を行ったところ図9のようになった。これは回帰分析の結果、算出される個別満足要因ごとの回帰係数の大きさを加算し、そのシェアを見ることで、どの要因が最も全体満足度に大きな影響を与えているかを判断しようとするものである。この結果から、全体の満足度と「生活が変化に富んでいるかどうか」とは比較的大きな相関があり、全体的な生活満足度の判断に「変化」要因が強い影響を与えているのではないかとこの問題意識が抽出できた。ここで、「人間関係」要因が含まれていないが、これは全てのデータを取り入れた場合の回帰分析において、「人間関係」要因の係数が負値を取ったため合理的なモデルとは考えにくく、当該要因を削除したためである。

さて、これに関して興味深いのは、同様の分析において、過去三回は、いずれも「生活の安定や安心」要因が全体の半分程度のシェアを取っており、今回の「生活変化」要因と同様のポジションを占めていたことである。三年間を通じて、かなり頑健な結果であったのにも拘わらず、今回はその構図が大きく変わっている。四年前は、企業の破綻やリストラ（人員整理）がまだ収まっておらず、年金など公的制度の基盤の揺らぎ、格差問題の台頭、ネット詐欺といった新しい犯罪など生活全般のリスクやそれに対する不安というものが蔓延していた。その後、実感なき景気回復とはいえ、企業収益も改善し、バタバタと大手企業が倒産するということはなくなった。その結果、生活者のリスク意識もひと段落したのかもしれない。不安要因がひとまず落ち着くと、今度は生活の変化や豊かさといったものに関心が移行していく。あくまで限られたデータからの仮説に過ぎないものの、このような構図を描くことができる。

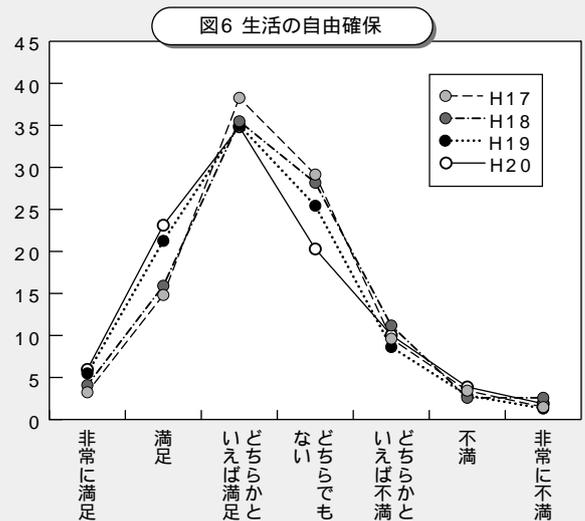
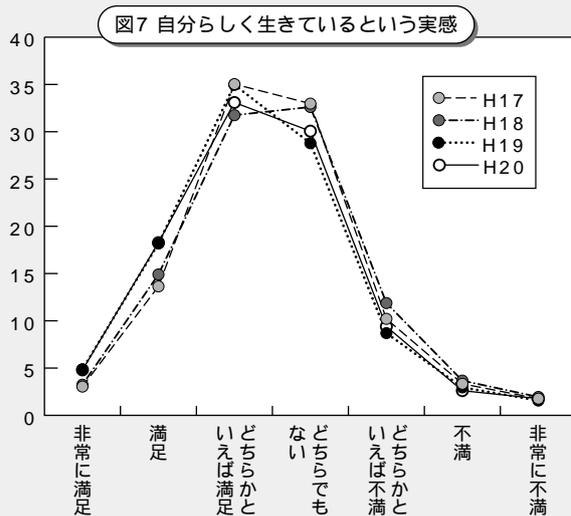


図9 生活満足度要因分解(平成20年)

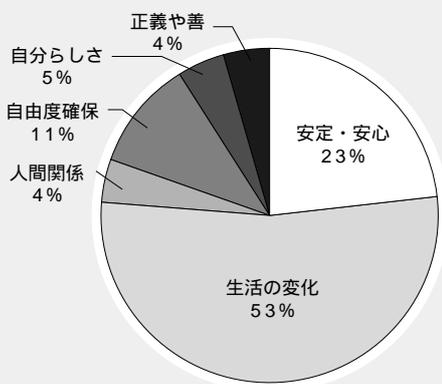
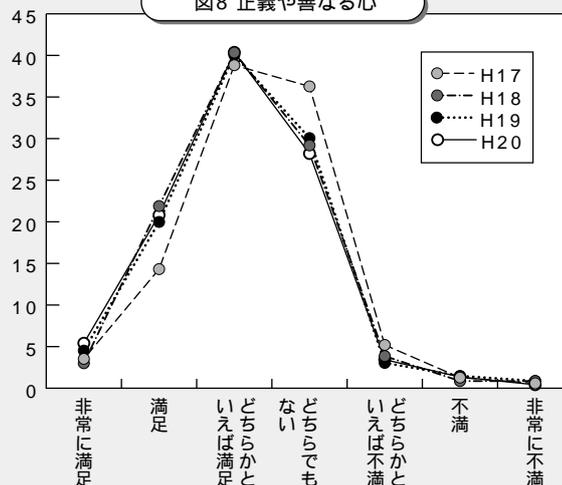


図8 正義や善なる心



## 個人の生活満足度を追跡する

本調査はパネル調査である。パネル調査とは、第一回の回答者に毎年、継続的にアンケートの回答をお願いするという追跡調査のことである。これにより、単に各年の分布を見るだけでなく、各回答者が、どのように答えを変化させていったかの推移を観察することができる。平成二〇年調査の回答者九六四人中、平成一七年、平成一九年も生活満足度の設問に解答いただいた方は五四七人であった。平成一八年もあわせて四回全てに回答いただいたのは三四八人である（前述のように、平成一八年は郵送調査のみ行っており、他の調査の回答者が千人程度であるのに対し、平成一八年は七〇〇人弱と少なくなっている）。

ここでは、主にこの五四七人を検討の対象とする。つまり五四七人を全体の九六四人から抜き出すことになるが、その際に偏りがあつてはならない。その確認のために、五四七人の生活満足度のグラフ（図10）と全員のグラフ（図1）を比較すると、傾向としてほとんど差はない。したがって、これからの議論において対象者を継続回答者に絞り込んでも重大な問題ではないとの前提で議論を進める。

### 満足度の推移（二時点間）

まず、四年間の推移を初年（平成一七年）と今年（平成二〇年）の二時点の変化で見よう。それを示したのが表1である。これを見ると、図10で見た分布の詳細が明らかになる。図10だけだと、あたかも不満を持っていた層、あるいはどちらでもない層と答えていた層の一部が、よりよいランクに上がっていったというような印象を持つてしまう。しかし実際には、四年前「非常に満足」と答えた九人の中で、今年も同じように「非常に満足」と答えた人は二人（二二％）に過ぎず、五人（五八％）が「満足」に下がり、一人が「どちらかといえば満足」に二段階ダウン、一人は「非

図10 生活満足度の分布（568人）

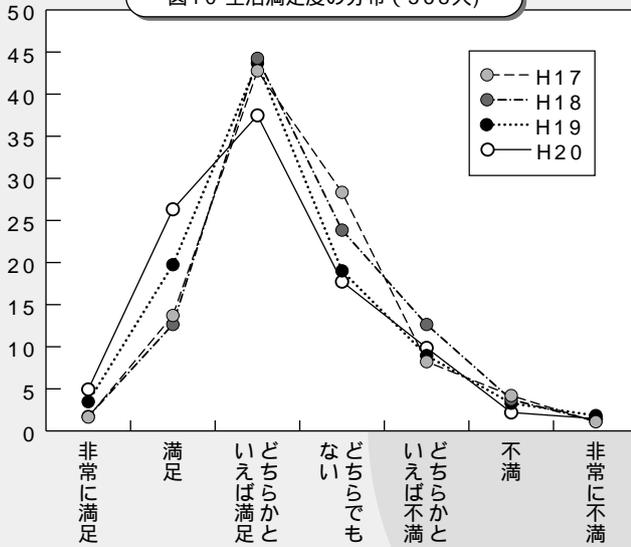


表1 H17年～H20年 生活満足度の推移(クロス表)

		H20						合計	満足度 平均値	
		非常に満足	満足	どちらか か は 満足	どちら でもない	どちら か は 不満	不満			非常に 不満
H17	非常に満足	2	5	1				1	9	2.44
	満足	11	44	14	5	1			75	2.21
	どちらか か は 満足	11	72	114	21	13	2	1	234	2.84
	どちら でもない	1	17	59	53	20	3	2	155	3.59
	どちら か は 不満	2	3	12	10	13	4	1	45	4.00
	不満		3	5	5	5	2	3	23	4.30
	非常に 不満				3	2	1		6	4.67
合計		27	144	205	97	54	12	8	547	3.14

単位は人（空欄は0人）

常に不満」との結果になっている。

同様に四年前「満足」と答えていた人七五人のうち一人(一五%)は、「非常に満足」に改善し、四四人(五九%)は現状維持であるが、二〇人(二七%)は悪化している。平均が上がったとしても、全体が平行して改善しているわけではなく、さまざまな変化の結果が合計値に表れているに過ぎない。考えてみれば当たり前の話ではあるが、実際の数字で表せば、それがどのような変化であるかがわかり、その「動き」を感じることができる。

また、生活満足度を「非常に満足」1、「非常に不満」7として、今年の数値を単純平均してみた(数値が小さいほど平均的な満足度は高くなる。表1の右端)。これを見ると、四年前の生活満足度が高いほど、四年後、すなわち今年も生活満足度が相対的に高い傾向があることが示されている。四年前に「非常に満足」であった人が、今年も満足(「非常に満足」)と「どちらかといえば満足」である率は高い。全回答者の四二%が現状維持で、五八%が変化(改善四〇%、悪化一八%)している。この全体像を棒グラフで表現したものが図11である。この結果から、生活から得られる満足感は持続的であるということがいえるかもしれない。あるいは、幸福を感じるのには性格的な影響が大きく、四年前に満足だと答えた回答者は、いつも満足と答える傾向を持っているということがいえるのかもしれない。既存の研究などから判断すると、その両方の効果があるようだ。

**満足の推移(三時点間)**

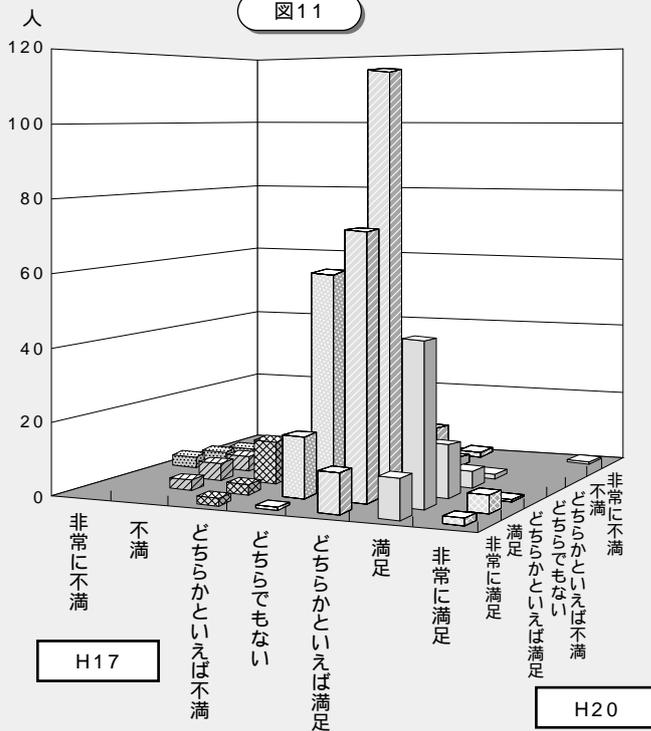
次に、第一回、第四回に加え、第三回(平成一九年)の結果も含め、多重クロス表という形で掲載したのが表2である。やや見にくい表だが、例えば、左上の数値1の意味は、第一回調査で「非常に満足」と答え、第三回調査でも「非常に満足」と答えた人で、今年も「非常に満足」であった人が一人いるということを表している。つまり、三年続けて「非常に満足」であったのは、たった一人ということになる(ちなみにこの回答者は第二回にも回答をく

表2 H17年~H19年~H20年の生活満足度(多重クロス表)

H17		H20							合計(人)
		1	2	3	4	5	6	7	
1	H19	1	1						1
		2		4	1				5
		3	1	1					2
		7						1	1
2	H19	1	3	4					7
		2	4	20	6	1			31
		3	2	16	8	1	1		28
		4	1	3		2			6
		5	1	1					2
3	H19	7				1			1
		1	2	4			1		7
		2	7	30	14	4	2		57
		3	2	34	79	9	4	2	130
		4		3	18	6	4		31
		5			2	2	1		5
		6		1	1			1	3
4	H19	7						1	1
		1	2				1		3
		2	1	6	4	2			13
		3		6	34	11	4	1	56
		4	2	18	26	8			54
		5	1	3	10	4	2		20
		6			2	3			6
5	H19	7			2	3		1	3
		2		1		1			2
		3	1	2	7	2	2		14
		4			3	3	2	1	9
		5	1		1	3	7	2	14
		6			1	1	2	1	5
		7							1
6	H19	7							1
		1		1					1
		3		2	5	1			8
		4				1	1		2
		5				2	2		5
7	H19	6			1	1	2		4
		7				1	1		3
		3				1			1
		4				2			2
		5					2	1	3

空欄は0人

図11



ださっており、そのときの生活満足度も「非常に満足」であった。同様に「満足」なら「満足」「どちらともいえない」なら「どちらともいえない」と、三カ年一貫して変わらないのは一三五人(全体の二五%)であった。一度変化したが、またはじめの評価に戻ったのは九三人(一七%)である。それに対して、一貫して満足度が改善し続けたのは一八九人(三五%)と最多数を占めた。一度下がったが、結果的に改善した人は一五人、一度上がった次下がったけれども、はじめよりはよい人が一七人と少数であった。それに対し、一貫して悪化した人も七四人(一四%)と一定数存在している。上下して、結局下がった人は一四人いる。

二時点間のクロス表を見るよりも複雑であるが、満足度が一貫して改善し続けた回答者が全体の三分の一以上いるということは、この四年間が、少なくとも生活意識の上では回復局面にあったことが強く表れている。現在、実感なき景気回復といわれている。生活満足度という指標に関しては、どの程度その変化を意識していたかは不明であるものの、数字の上では着実に改善してきたということを示していて興味深い。

## 幸せな人のプロフィール

結果として、四年間一貫して「非常に満足である」を選択した回答者は、たったの一人であった。これは千人の中の一人というわけではなく、四年間、毎年欠かさず回答をいただいた三四八人の中で一人だけということである。四年間、一貫して「非常に満足」を選択し続けた唯一の回答者とはどのような人であろうか。無記名式のアンケートであるから、当然、個人の特定はできないものの、フェイスシートおよびその他設問に対する回答から、以下のような人物像が浮かび上がってくる。現在四〇歳代前半、専門技術職、既婚、小学校までのお嬢さんのおいる家族構成で大学・大学院卒、昨年から今年にかけて同居人数(お子様?)が一人増えている。世間的には中の上の家庭との自己認識がある。生活全般以外の各要素でも、おおむね満足度が高いものの、収入や資産水準に関しては「どちらともいえない」と評価している。他者配慮や社会的課題に対する貢献に対して積極的

とはいえず、保守的側面が見えるものの、自分の力を高め長期的視点で判断しようという態度が表れている。

資産や所得に関する回答はなかったため経済状況の詳細はわからないが、総じて非常に一般的な生活者像が浮かんでくる。自己評価としての生活満足度の頂点にいるのがそのような、遠い存在ではない身近な方であるという事実は、いかに人生や生活に関する理念や哲学が満足感に影響を与えるのかということを示唆しているように思う。

最後にクラスター分析を行った。生活満足度の推移に従って六つのクラスターを形成し、それぞれのクラスターに特徴はないか調べてみた。結果的には、性別・年齢・家族構成などに関して差は見られず、学歴・年収・資産といった経済項目に関して有意な差異を確認した。とはいえ、それほど顕著なものではなく、高学歴・高所得・資産が豊富であるほど満足度の水準が高いクラスターに集まりがちであるという程度でしかなかった。

## 最後に

本稿では生活意識調査のデータをもとに、生活満足度の「変化」に着目して論じてきた。さまざまな社会的課題が顕在化しているものの、少なくとも意識の上ではこの四年間、特に最近の二年間で改善傾向が明確になった。以前は、最も重要な要因であった生活の安全や安心から、生活の変化などの積極的な項目への関心が高まる兆候を見せている。アンケート後の四月には、後期高齢者医療制度など、さまざまな社会問題が新たに明らかになったため、この傾向が続くかどうかについては不明である。しかし少なくとも、少し先のことも考えようという意識が芽生えてきているようでもあり、それは歓迎すべきことではないかと考える。本稿では、そのような生活者の姿を描いたのではないかと考えている。

今回の意識調査では、二〇二〇年という将来の生活像も訊ねている。本稿で紹介したような意識を持つ生活者が、将来についてどのように考えているのかについては、次号で詳しく論じることとしたい。

(大阪ガス㈱ エネルギー・文化研究所 主席研究員)

CEL